

愛甲・高森・小野に伝わる古代〜中世の歴史ロマン

2021.4.02 Y.M

◆ぼうさいの丘公園（ハウダイヤモンド古墳群）：丘陵頂上付近に全長 65m に及ぶ大規模な前方後円墳（1号墓）の他、直径 15~30m の円墳 3 基の存在が確認されており、1号墓から大量に発掘され土器から、4世紀後半築造とされる。また、南東 1km には船子地頭山古墳（全長 72m の前方後円墳、4世紀末~5世紀初築造）、南 1.7km（愛甲石田駅南東 200m）の愛甲大塚古墳（全長 80~90m の前方後円墳、4世紀頃築造）等、相模川西岸の丘陵地に、相武有数の大規模な前方後円墳が並んでいる。いずれも、東海古道（矢倉沢往還道）ルート上の交通の要所に位置しており、4世紀には、大和朝廷の支配下において、この地方を治める強力な豪族が愛甲・南毛利・温水付近に存在していたことを窺わせる。

（注）ハウダイヤモンドの名称は、戦時中この高台に高射砲陣地が設置されていたことによる。砲台工事で、古墳の外観は大きく損なわれてしまった。また、ぼうさい公園の工事が始まる前の 2010 年頃まで、国道 246 号側に、厚木恵心病院の廃墟が残り、近づく人がいない幽霊が住む心霊スポットだったようだ。

◆曹洞宗愛甲山寶積寺（愛甲三郎季隆菩提寺）：愛甲三郎季隆（すえたか）の菩提寺「寶積寺（ほうしゃくじ）」は、河岸段丘上に建つ愛甲三郎館跡崖下の旧玉川畔に位置する。当初菩提寺は「香華院」の名称であったが、のちに曹洞宗寶積寺に改名され、現在に至る。旧玉川が、新玉川に付け替えられた昭和 19 年前までは、旧玉川が度々氾濫し、寶積寺の境内はその度水に浸かって荒れ果て、どれが愛甲三郎の墓石かわからなくなってしまったという。その上、寺の由緒が刻んであった鐘楼が戦時供出で失われ、住職が紙に書き写しとってあった由緒書の内容も損傷が激しく、解読不能になってしまったという。やむなく境内に散乱していた古い五輪塔を集め、現在の愛甲三郎供養墓を整備したという。なお、愛甲城があったとされる臨濟宗圓光寺境内にも、愛甲三郎季隆の慰霊塔が存在するが、愛甲三郎が活躍した鎌倉前期のものではなく、鎌倉後期以降に設置された慰霊塔であるという。

◆愛甲三郎季隆館跡と愛甲三郎季隆のプロフィール：小野妹子¹を中興の祖とする小野一門の末裔である、横山隆兼を首領とする武蔵横山党が、平安末期、八王子を根城にして相模国方面に勢力拡大を図る中で、愛甲庄にも進出の手が伸びた。2年に及ぶ攻防の末、当時愛甲庄を支配していた愛甲内記平太夫を殺害し、愛甲庄は横山一党のものとなった。横山隆兼の三男季隆らが愛甲庄に入り、横山季隆は、愛甲三郎季隆と名乗り、鎌倉幕府を開いた源頼朝の信頼を得て、身辺を警護する任に就いた。

愛甲三郎季隆の館は、現在館跡の石碑と神明神社がある場所から、南東側の「屋敷添橋」側に広がった場所にあったという。東名高速道路並びにぼうさいの丘に通じる防災道路を建設する際に、大規模な遺跡発掘調査がなされ、北側が 7~8m の崖となっている台地の東・南・西の三方を、コの字型に囲む大規模な環濠遺構が発掘されている。その他、遺構はほとんど残っていないが、南東約 1km の場所（現在、臨濟宗圓光寺境内）に愛甲城があったと言われている。

愛甲三郎が愛甲庄の主であったのは 12 世紀から 13 世紀初めのたった半世紀程であった。愛甲三郎一族が滅亡したのち、愛甲庄は、一旦毛利家の開祖となる毛利季光（すえみつ）の支配するところになったが（毛利家については後述）、1247 年に勃発した宝治合戦に連座して毛利季光も滅んでしまったことから、愛甲庄は鎌倉幕府から、熊野大社に寄進され、以後熊野大社の所領地になった。南北朝時代に、愛甲庄の現在地（愛甲石田駅から北北東約 500m）に熊野神社が勧進された。境内には康暦 8 年（1380

年)の紀年銘が刻まれた関東地方最古とされる石灯笼が現存している。

*1 **小野妹子**：近江小野庄出身の豪族。飛鳥時代の607年と608年、推古天皇の命により、「日出処天子・・・」で有名な国書を携えて、**遣隋使**として、2度大陸に渡り、多くの大陸文化を持ち帰り、以後の遣隋使、遣唐使への先鞭をつけた。また、平安時代活躍した小野一族として、**小野篁(たかむら)**、**小野東風**、絶世の美人で歌人の**小野小町**(「花の色は移りにけりないたずらに わが身世にふるながめせし間に」(古今和歌集・百人一首))が有名。小野小町の出自は不明の点が多いが、小野篁の孫として、奥州(秋田)湯沢で生まれたとする伝承の他、厚木小野の里を含め、全国10か所ほどに生誕地とする場所が存在し、墓や神社、小町由来の旧跡が各地に存在している。(注)平安時代までは、貴族であっても、風葬が一般的であったため、皇族を除いて、墓が存在しないのが普通であったという。

愛甲三郎季隆は鎌倉幕府御家人中随一の弓の名手(特に騎馬上からの矢射)として知られ、源頼朝の護衛の任に当たり、年頭の御弓矢始めでは、一番射手を勤めた。富士裾野の巻狩り最終日の1193年5月28日夜に起こった**曾我兄弟の仇討**の際には、手傷を負いながらも頼朝の警護に当たるなどの数々の武勇伝が残されている。鎌倉幕府の重臣間で争いごとが頻繁に起こり、**畠山重忠**と**北条時政**が争った**三俣川の戦い**(1205年)では、二俣川付近の横穴式古墳に潜んで、畠山勢を待ち伏せし、総大将の畠山重忠を弓矢で仕留め、首を北条時政に献上したという。また、源頼朝の愛妾**丹後局**が身ごもったことを知った妻**北条政子**は、畠山重忠に殺害を命じ、その家人本田次郎親経が由比ガ浜に丹後局を誘い出したが、替え玉を立て、愛甲三郎に頼んで、小野の里に匿ったという。それを知って怒り狂った**北条政子**は、北条勢1000人の兵士を愛甲庄に差し向け、**愛甲城**と**愛甲三郎館**を攻めさせ、いずれも、灰塵に帰してしまっただけという(詳細後述)。1213年、打倒北条を掲げて**和田義盛**が蜂起した**和田合戦**が勃発した。一族と姻戚関係にあった横山一党と愛甲三郎一党は、和田勢に味方して戦ったが、北条勢の巧みな作戦に敗れ、愛甲三郎をはじめとする主だった武将はほとんど討ち死にし、武蔵横山党と愛甲三郎一党は没落・消滅してしまった。

◆**高森道了尊(了庵慧明禅師と道了大薩埵の古跡地)**：**大雄山最乗寺**を開山した了庵慧明禅師が1411年3月27日、75歳で還化するまで、弟子の**道了大薩埵**と修行した旧蹟地。禅師が還化した翌日、道了大薩埵は天狗となって空に舞い上がって姿を消してしまった。それ以降、道了大薩埵は天狗に化身して、最乗寺を守護する道了尊者として、その**五大御誓願**とともに絶大な信仰を集めている。

了庵慧明(りょうあんえめい)禅師は1336年伊勢原下糟屋の医者の子に生まれた。**建長寺**、**円覚寺**で修業後、丹波国**永沢寺**で通幻禅師に教えを受け、更に能登国(元)総持寺で蛾山禅師の教えを受けた通幻禅師門下第一の高僧の地位を得て、1391年相模国に戻り、弟子の**道了大薩埵**とともに、禅師58歳の1394年3月15日、曹洞宗**大雄山最乗寺**を開山。その後、**七沢広沢寺**に隠棲していたこともあったそうだが、生まれ故郷に近いこの高森の地で、還化するまで修行に励んだという。

道了大薩埵(どうりょうだいさった)：山岳信仰の山伏僧であった道了大薩埵が近江国**三井寺(圓城寺)**で修業中の1384年7月、山伏最高位にあった京都**聖護院**の**覚僧**が吉野から熊野への大峰修行中、悪鬼妖魔に行く手を阻まれて難渋しているのを知って、法弓で结界し、斧を振るって妖怪悪魔を退治するなど、その神通力は広く世に知れわたり、**相模房道了尊者**として崇められ、**足利義満公**による金閣寺修法、京都五山**相国寺**の修法等を執り行っていた。1393年9月17日、**三井寺勸学院**天狗の間で修行中に、突然天狗となって西の窓から飛び去り、故郷の相模国に帰ったとされる。

故郷に帰った大薩埵は、了庵禅師の弟子となり、禅師とともに、大雄山最乗寺の開山に尽力したのち、高森の地で師匠とともに修行に励み、1411年3月27日、了庵禅師の還化を見届けた翌日、天狗に化身

して、飛び去る際に、声高らかに発せられた**五大御誓願**が、道了尊のお教えとして広く知られ、信仰されている。この御誓願は、**高森道了尊本堂内**の額に掲示されているので、興味のある方はご覧ください。

◆**高森神社**：延喜式（平安中期の927年制定）内社 相模13社（大住郡4社）の一つである**高部屋神社の論社**（論社：延喜式に記載された神社と同一もしくは後裔と推定される神社）。主祭神は**味須岐高彦根命**（みすきたかねのみこと、稲作文化を広めた加茂族首長で、大国主命の長男、この神を主祭神とする神社は全国に6社しかない）で、五穀豊穰、商売繁盛、魔除け、悪病消除のご利益があるとされ、近隣住民からの信仰が厚い。創建時期は不明。神仏分離令により、明治6年に高部屋神社から**高森神社**に改称された。平成21年2月3日未明に不審火により全焼したが、平成23年2月19日に再建された。西方500mの尾根上に**吾妻神社**（主祭神：弟橘比売命）の小社がある。

◆**小野神社にまつわる薩摩島津氏開祖島津忠久の生母丹後局と愛甲三郎の関わり**：玉川郷を見渡せる小高い山の上に鎮座する**小町神社**は、この地で**小野小町(小町姫)**が誕生したとする伝承に基づいて、小町姫を祀る神社として創建されたとされているが、創建時期は不明である。近くに、小町姫の墓塚や小町姫の化粧井戸等の旧跡と称するものが保存されており、これから述べる**丹後局**の伝承から、**愛甲三郎**がこの地の領主になった鎌倉時代前期には、すでに存在していたものと推測される。

これから述べる**丹後局**は、源頼朝の乳母比企尼（ひきのあま）が生んだ3人の娘の長女で、源頼朝に見初められ、やがて身ごもったという。それを知った妻北条政子は怒り狂い、**畠山忠重**に殺害するよう命じたという。**丹後局**を由比ガ浜に誘い出したが、殺害するのは忍びないと思いとどまり、代人を立てて殺害したことにし、**愛甲三郎**に頼んで、小野の里に密にかくまったという。**丹後局**の黒髪は、政子のあまりにも激しい嫉妬への恐怖から、一夜にして、白髪になってしまったという。そこで、**小町神社**に日参し、祈り続けたところ、ほどなく元の黒髪に戻ったと言い伝えられている。

小野の里に匿われていることを知った北条政子は、1000人の北条方の兵士を愛甲庄に差し向け、**愛甲三郎の館**と**愛甲城**を火攻めにし、悉く焼き払ってしまった。その時、**愛甲三郎**は、**丹後局**のお供をして、**日向薬師**に安産祈願に出かけていたという。家来の知らせを受けて、小野の里の**玉川**²に架かる橋(玉川球場前)まで戻ってくると、燃え盛る我が館を目にし、これまで北条に尽くしてきた我が身であるが、北条と縁を切ると心に誓ったという。これ以降、この橋は**縁切り橋**と呼ばれるようになったと伝えられている。**愛甲三郎**は、北条の追手から**丹後局**を守るため、西国に逃がしたという。**丹後局**は、摂津国（大阪）まで逃げ延び、たどり着いた**住吉大社**の境内で、男の子を無事出産したという。公家の**惟宗広言(これむねひろのり)**の妻となった**丹後局**は、生まれた子に、養父の姓をもらって、**惟宗三郎**として育てた。惟宗三郎7歳の時、鎌倉において、**源頼朝**との初見を果たし、その場で元服して、**丹後局**のもう一人の命の恩人**畠山重忠**の一字を頂いて、名を**惟宗三郎忠久**と改めたという。頼朝より、近衛家の荘園である**薩摩・大隅・日向**の惣地頭に任じられ、7歳の忠久は、**丹後局**と養父とともに、南九州に下向し、居住地に選んだ**薩摩島津庄**の地名を姓として、**島津三郎忠久**と名乗った。3代目**島津久経**以降の当主は、薩摩の地に根を下ろし、地道な荘園経営に励み、着々と地力を蓄え、九州最大の大名にのし上がり、秀吉の九州平定、関ヶ原の戦い等の戦国の乱世を上手く乗り切った。徳川の世になると、朝廷と徳川幕府の双方と姻戚関係を強めて、幕府も手出しできない、外様の大大名の地位を獲得した。開祖忠久から続く島津氏の血筋を絶やすことなく、約500年の間、安定して藩主を引き継ぎ、最後は**毛利氏**を藩主とする**長州藩**とともに、明治維新の大業を成し遂げたことは、いまさら申し上げるまでもない。

なお、**島津忠久**の出自に関し、忠久は頼朝の子ではなく**惟宗広言**の実子とする説や、生母は**丹後局**ではなく、別人の**丹後内侍**とする異説がある。しかし、島津氏正統系図には、源頼朝と側室**丹後局**の間に生ま

れた島津忠久を島津氏第一代の始祖者と明記しており、島津氏代々の先祖を祀る花尾神社（鹿児島市）は、源頼朝と丹後局を主祭神として祀り、境内には丹後局の墓所も存在している。したがって、嫉妬に狂った北条政子の毒牙から丹後局の命を守り、島津忠久の誕生に繋げた、われら郷土の誉れ高き武将 愛甲三郎季隆が、島津氏誕生に大きく寄与したと考えてよいだろう。

しかしながら、肝心の愛甲三郎は、前述したように、和田合戦で、由比ガ浜で討ち死にし、北条方に大敗した愛甲一門と武蔵横山党の主だった武将はほとんど討ち死にし、残った者も悉く命を奪われ、愛甲庄の愛甲一門は消滅の憂き目にあった。ところが愛甲氏は不滅であった。

島津忠久と丹後局が薩摩に下向したとされる 1197 年(あるいは 1186 年とも)、護衛役として愛甲一門の愛甲賢雄（山伏愛甲小太郎忠雄）が随行して薩摩に渡り、大隅国桑原郡吉松郷に移り住んだと伝えられている。戦国時代になると、敵国との交渉役として、愛甲相模房光久が活躍し、江戸時代には、薩摩藩重臣として愛甲緒民部左衛門等の名前が記録に残っているという。日本姓氏起源辞典によると、現在日本国内に住む愛甲姓は総勢約 3900 人で、その起源は厚木市愛甲と明記されている。居住地の内訳は、1 位.鹿児島県~1100 人、2 位熊本県~600 人、3・4 位福岡県と宮崎県がともに~300 人と、九州地方に 2/3 の~2600 人が居住しているという。その次に多いのが、大阪・東京・愛知・神奈川の各 200 人。兵庫・千葉の各 130 人、発祥地の愛甲と高森に住む愛甲姓はごくわずかと記載されている。愛甲三郎一門が戦に敗れて消滅する直前に、丹後局と島津忠久に随行して薩摩にわたって住み着いた愛甲一門の人々が、世代を重ねて、九州一円に拡散し、九州に 2600 人の愛甲さんが暮らしている事実を知って大いに誇りに感じた。

***2: 玉川の洪水と河川改修: 旧玉川**は、大山の東側の水を集めた七沢川と日向川が玉川小学校付近で合流して、玉川と名を変え、川幅 2~3m の小川となって南東に流れ下り、小野の里に入ると、小町神社の山裾を蛇行しながら東に流れ、愛名入口付近で南に流れを変えて、玉川球場付近から、愛甲の台地の北側の縁を南東に流れ下って、平塚市小稲葉付近で渋田川に合流したのち、花水橋のすぐ上流で金目川に合流して相模湾に流れ出でいた。関東大震災以後、玉川の川床が隆起したためか、大雨の度に旧玉川流域が水害に見舞われるようになり、付近の住人を大いに困らせた。そこで、昭和 10 年以降、大規模な河川改修事業が実施された。その概要は、川を新たにまっすぐに付け替え、川幅を約 10m に広げて、酒井付近で恩曾川と合わせ、戸沢橋付近で相模川に合するという、きわめて大規模なもので、昭和 19 年に完成し、新玉川と命名された。以来 70 年間、小野の里は一度の水害に遭うこともなく、実り豊かな水田地帯に変わった。また、旧玉川は暗渠となり、歴史に名をとどめる竹橋や縁切り橋は、その在りかを示す花崗岩の指標のみになった。

◆**西国最大の大名毛利氏の始祖は相模国愛甲郡毛利庄にあり**：薩摩島津氏だけでなく、明治維新を成し遂げた長州藩藩主毛利氏まで、我々が住むこの地にあるという、史実を皆様ご存じでしょうか？今回の歴史ウォーキングコースには含まれていませんが、簡単に説明させていただきます。

鎌倉幕府成立直後の 1192 年、源頼朝の要請に応じ、京の公家大江広元（おおえひろもと）が鎌倉に呼び寄せられ、鎌倉幕府の政務を担い、荘園の経営管理等に多大な功績をあげたという。幸い文官であったため、度々勃発した御家人間の争いに巻き込まれることもなく、権勢をふるった北条政子と時を同じくする 1225 年夏に、鎌倉幕府の重臣のまま没したという。大江広元には 6 男 5 女の子がおり、男子には、各地の荘園が与えられたという。

四男の大江季光には愛甲郡毛利庄（現在の南毛利・下古沢付近）が与えられた。毛利庄の主となった季光は先例に倣って、名を毛利季光（もうりすえみつ）と改めたという。古い言い伝えによると、季光の館は、下古沢三島神社付近にあったとされ、三島神社境内には、毛利季光の館跡とする石碑があるが、付近にそれらしい遺構は発見されていないようだ。

1247年宝治合戦が勃発した。これは、執権となって勢力を振るう北条氏に、有力御家人三浦氏が戦いを挑んだものだった。北条氏と三浦氏の双方に姻戚関係にあった毛利季光は、大いに悩んだが、三浦氏から嫁いできた妻の強い願いにより、三浦方に味方して戦ったが、敗れ、鎌倉の法華堂で、500人の一族郎党とともに、自害して果てたと伝えられている。毛利氏はこの一代で終わったかと思いきや、しぶとく血筋がつながって、明治維新の大業を成し遂げた長州藩に帰着した。その経緯は以下の通り。

季光が北条に敗れる前、季光の四男・毛利経光（つねみつ）が、越後国佐橋庄（柏崎市）と安芸国吉田庄（広島県吉田町）の守護代職に任じられており、合戦が起こった時には、任地において、合戦に関与していなかったため、連座を免れ、領地も安堵されて、生き残ったという。2代目毛利経光の跡を継いだ、経光四男毛利時親（ときちか）が、越後より、交易が盛んで豊かな安芸国を選んで、ここに定住した。この230年後、毛利元就（もとなり）が、守護大名の大内氏と尼子氏を倒し、小国の領主から、中国地方全域を支配する戦国の大大名に上り詰めた。分家の吉川や小早川を含め、毛利一門が団結して、信長や秀吉の圧力に対抗して。西国大名の地位を守り抜き、最後は毛利氏の藩主を戴く長州藩が、薩摩藩とともに、明治維新の大偉業を成し遂げたのは、衆知の通りである。

毛利氏家系図には、大江広元の子『毛利季光』を毛利氏の開祖とし、2代目経光、3代目時親と記載されており、毛利氏始祖毛利季光の出自について、異論・異説はない。また、日本姓氏起源辞典によれば、毛利姓の発祥地は神奈川県厚木市旧毛利庄と明記されている。なお、現在、毛利姓を名乗る人口は、全国で約32,600人、居住県別では、1位福岡県~3100人、2位東京都~2300人、3位愛媛県~2200人、発祥地の神奈川県は8位~1,500人である。ちなみに、毛利庄に近い小野神社の宮司は毛利さんのようだ。

◆**小野神社と日本武尊東征の野火の災禍の故事**：愛甲郡玉川郷小野の里に鎮座する小野神社は927年に発行された延喜式神名帳に記載されている相模国式内13社の一つで、愛甲郡唯一の歴史と格式のある式内神社である。社伝によると、716年行基が当社に薬師如来像を奉安したとの伝承があるが、創建時期はわかっていない。各地に点在する小野神社は、いずれもかつて小野一族か、その末裔が活躍していた場所（近江国大津、武蔵国調布、相模国町田等）にあることから、小野氏の先祖を祀った神社と考えられる。小野の里に存するの小野神社の主祭神は天下春命（あめのしたはるみこと）とされるが、明治になって、主祭神に、後述する野火の災禍の故事から、日本武尊（倭建命）が追加された。新編相模風土記には、「閑香（かんか）大明神」という名称でも呼ばれていたとする記述があり、社殿にもこの名称の扁額が掛っている。また、かつて小野神社は、現在の場所から南西約200mの神の山と呼ばれる丘の上にあったが、1830~1848年頃、現在の場所に転社したと記録されている。

本神社は、愛甲一族の守り神として信仰を集め、1194年には、大江元広（毛利の開祖季光の父）と愛甲三郎の寄進により、社殿が再興された。また、1591年の日付で、社領2.5石を安堵するとする徳川家康の朱印状が残っている。現在の社殿は1848年に再建されたものだという。

◆**日本武尊（倭建命）東征における野火の災禍の故事の舞台が小野の里とする説について**：12代景行天皇（在位西暦71~120年）の皇子「ヤマトタケル」の東征の物語の中で、「野火の災禍」のくだりは逸話として、どなたも一度は聞いた話だと思う。この逸話は古事記*3と日本書記*4に記述されており、内容が微妙に異なっている。古事記に記載されている逸話を要約すると、東征の途中、武相まで来たとき、一行はこの地の国造に、草の生い茂る湿地帯に誘い込まれて、火攻めにあつて命を落としそうになったが、行きがけに立ちよった伊勢神宮祭主の叔母から授かった三種の神器の一つ「天叢雲剣（アマノムラクモノツルギ、別名草薙剣）で、周りの草を刈り払い、叔母からもらった袋を開けて取り出した火打ち石で、刈り払った草に火をつけ、逆に豪族たちを追い詰めて殺し、焼遣の地で死体を焼いた。

一方、日本書記の当該部分の記述には、天叢雲剣を振るって草をなぎ倒したという記述はなく、野火の災禍に遭った場所が、駿河の焼津となっている。一般に、野火に遭った場所は焼津とする日本書記の説を支持する人が多数のようだが、古事記には、この後のエピソードとして、一行が三浦半島の速水から東京湾を船で木更津に渡ろうとしたとき、俄かに海が荒れて、船が転覆しそうになった時、ヤマトタケルの妃「弟橘比売命」が入水して、海の神を鎮めたという悲しい逸話が記載されている。その際、弟橘比売命が詠んだ辞世の歌「さねさし相武の小野に燃ゆる火の火中に立ちて 問いし君はも」には、野火に囲まれて立ち往生する弟橘比売命が倭建命の安否を気遣って、どこにいますか～大丈夫ですか～と叫んでいる様子がリアルに表現されている。決め手は、この歌の冒頭の「相武の小野」と、場所を特定する文言が記載されていること。1~2世紀頃の平塚・茅ヶ崎付近はまだ海で、相模川河口付近は、寒川付近まで大きな入り江になっており、現在のように湘南海岸に沿って陸路で三浦半島に行くのは不可能だったという。そこで、三浦半島に行くためには、東海古道(矢倉沢往還)のメインルートである伊勢原・厚木から相模川を渡って、海老名・相模大野を通過したはずで、その当時、このルート上には、沢山の湿地があり、野火に遭った場所は、玉川郷小野の里から相模大野付近のどこかであるとする説も根強くあるようだ。また文字もない2世紀の出来事を約600年後に文書にまとめた古事記と日本書記。大和朝廷が東国を支配下に置く過程をドラマティックな物語に仕立てあげたものだとすれば、場所や内容が相違する等の子細なことにこだわる必要はなく、建国のドラマとしておおらかにとらえたい。

*3 **古事記**：天武天皇に仕えていた稗田阿礼(ひえだのあれ)が暗誦していた天皇の系譜と古い伝承を太安万侶(おおのやすまろ)が書き留めて、4カ月で3巻に編集し、712年に朝廷に献上された日本最古の歴史書。「誰が何をしたか」に重点を置いて記述しており、国内向けに天皇家の正当性をアピールしているところが本書の特徴とされる。

*4 **日本書記**：舎人親王(とねりしんのう)らが中心になり39年の歳月をかけて日本書記30巻を720年に完成させた。「いつ何があったか」をポイントに年代順に出来事を記載する構成とし、大和朝廷の正当性を国内外にアピールする国の公式歴史書として位置付けられている。大国主命の逸話等は記載されていないが、朝鮮半島や隋・唐との交流状況等の他、中国の文献引用もされているが、魏志倭人伝に記載されている卑弥呼に関連する記載はない。

◆**むすび**：今回愛甲・高森・小野の歴史ウォーキングを計画するにあたり、改めて郷土の歴史を学びなおしてみると、想像を絶する史実とダイナミックな歴史ロマンに出会い、大いに興奮しました。

私の自宅から愛甲三郎屋敷跡まで徒歩5分の距離。高森道了尊や小町神社、小野神社も私たちの散歩コース上にあり、数十年前から度々訪れていたのですが、こんなワクワクする歴史やエピソードがある旧跡とは想像もしていませんでした。私が住む愛甲を拠点に鎌倉初期に活躍した地元の英雄「愛甲三郎季隆」が薩摩島津氏の誕生に大きく関わっていたこと、毛利氏の開祖毛利季光がお隣の南毛利や下古沢出身であること、鎌倉時代の合戦で、滅びてしまったと思っていた愛甲三郎の子孫が、九州を中心に3900人も存在していること等、を発見して、大いに興奮しました。

今回の私の調査結果を、歴史ウォーキング実施に合わせて、TTCの皆様にご披露して、ともに楽しんでいただければ望外の喜びです。なお、浅識ゆえに、勘違いや事実と相違する記述があるかもしれませんが、その際は何卒ご容赦ください。

コロナ感染が収まらない中で実施する今回の歴史ウォーキング。現地で皆様に直に説明するのがベストですが、三密を避けるため、原則として現地での説明は割愛し、皆様には、事前に本資料をお目通しいただき、また、プリントアウトして、本資料を現地にご持参いただき、必要に応じて、現地で読み返していただければ、郷土の歴史ロマンをより深く理解し、興味を持っていただけるのではないかと存じます。